

5	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14101009	社会経済への浸透過程における技術の性格形成メカニズム（製造技術とITとの比較分析）	渡辺 千帆（東京工業大学・大学院社会理工学研究科・教授）	A
<p>（意見等）</p> <p>当該研究は、1990年以降のITの革新・活用でアメリカなどに大きく立ち遅れた日本の経済社会の課題について、社会経済への浸透過程における製造技術とITとの性格形成の差異にあるとする仮説をたて検証した一連の研究である。研究手法として日・米・欧・豪・印・中の各国間に国際ネットワークを構築し、データの収集と各国の比較分析を手堅く試み、成果をまとめたものである。2003年の論文では、我が国の社会経済体質が1980年代の製造技術による工業化社会には有効に通用したが、ITによる情報社会への移行に際し、アメリカに比べ有効に働かない興味深いモデルを提示し、明確な問題意識のもとに研究を開始している。特にネットワークの外部性を自己繁殖メカニズムとして再度定式化し、学問手続きを経て、政策的に意義ある結論に導いた。その成果を77報の査読付き学術雑誌に英文で発表したことは高く評価できる。</p>				
6	課題番号	研究課題名	研究代表者	評価結果
	14101001	聴覚の文法：言語と非言語とを包括する体制化の研究	中島 祥好（九州大学・大学院芸術工学研究院・教授）	B
<p>（意見等）</p> <p>本研究は言語と非言語とを包括する体制化をめざし、関連する各分野で活躍している研究分担者の協力を得て5年間にわたって進められた。個々の基礎的な研究は精密に行われており、それぞれ国際的な学術誌に掲載されており、評価できる。また、難しい未知の領域を解明するための手がかりが得られたと思われる。しかし、個々の研究が独立に行われており、それぞれの研究で得られた結果が、本研究全体の目的にどのように貢献しているかが十分に示されていない。全体の中での個々の研究の位置づけを明確にして、音声、音楽、人工音を含めて全体を統合した成果が示されていないことは残念である。今回得られた知見に基づいて、今後の研究の発展を期待したい。</p>				